

公益社団法人 日本口腔インプラント学会 関東・甲信越支部

第16回 学術シンポジウム

「若手歯科医師による！」
インプラント治療の包括的マネジメント



会期：令和8年8月2日(日)

公益社団法人 日本口腔インプラント学会 関東・甲信越支部

第16回 学術シンポジウム プログラム・抄録集

目 次

メインテーマ	3
支部長挨拶	4
大会長挨拶	5
セッションプログラム	6
シンポジウム抄録	8
協賛企業一覧	22
展示配置図	23

メインテーマ

「若手歯科医師による！」 インプラント治療の包括的マネジメント

会 期	令和8年8月2日（日）
会 場	日本歯科大学 富士見ホール
運営事務局	公益社団法人 日本口腔インプラント学会 関東・甲信越支部 第16回 学術シンポジウム運営事務局
主 管	日本歯科大学新潟病院口腔インプラント科
大 会 長	廣安 一彦(日本歯科大学新潟病院口腔インプラント科)
実行委員長	上田 一彦(日本歯科大学新潟生命歯学部 歯科補綴学第2講座)
準備委員長	瀬戸 宗嗣(日本歯科大学新潟生命歯学部 歯科補綴学第2講座)



公益社団法人 日本口腔インプラント学会

関東・甲信越 支部長
萩原 芳幸

会員の皆さまにおかれましては、日頃より支部活動ならびに本学会の発展に多大なるご支援とご協力を賜り、心より御礼申し上げます。

この度、公益社団法人日本口腔インプラント学会 関東・甲信越支部「第16回学術シンポジウム」が、日本歯科大学新潟病院口腔インプラント科の廣安一彦大会長、ならびに主管施設・関係者の皆さまのご尽力により、盛大に開催されますことを心よりお慶び申し上げます。

本シンポジウムは、会員の皆さまの知識や技術のさらなる向上、そして各研修施設同士の緊密な交流を深める場であると同時に、次世代の学会を担う若手歯科医師の育成と発表機会の創出を大きな目的として発展してまいりました。今回、廣安大会長のもとで掲げられた『若手歯科医師による！インプラント治療の包括的マネジメント』というメインテーマはまさに当シンポジウムの原点であり、これからのインプラント歯科界の未来を見据えた極めて意義深いものであると感じております。

各施設から推薦された10名の若手演者の先生方には、日頃の熱心な臨床への取り組みや研究の成果を存分に発表していただくことを期待しております。専修医、専門医、指導医を目指して日々研鑽を積んでいる若手歯科医師の新鮮な視点や先進的なアプローチは、出席される先生方の明日からの臨床に直結するだけでなく、指導的立場にある先生方にとっても新たな気づきや今後の指導方法の参考となる素晴らしい刺激となるはずです。

また、本シンポジウムの開催にあたり、支部からの援助に加え、多くの企業の皆さまから多大なご協力をいただきましたことに深く感謝申し上げます。会場では充実した企業展示ブースも併設されておりますので、ぜひ休憩時間等に足を運んでいただき、最新の知見や機材に触れていただきたいと思います。

本シンポジウムは毎年酷暑の中で開催されます。クールビズをはじめとした軽装でのご参加を歓迎し、リラックスした環境のなかで熱意溢れる若手歯科医師の発表を会員の皆さまとともに見守り、活発な議論を交わせることを楽しみにしております。



日本歯科大学新潟病院口腔インプラント科 廣 安 一 彦

公益社団法人日本口腔インプラント学会関東・甲信越支部，第 16 回学術シンポジウムを担当いたします日本歯科大学新潟病院口腔インプラント科の廣安一彦です。

このシンポジウムは，会員の知識・技術の向上や各研修施設同士の交流を深めることはもちろんのことですが，主として若手の発表機会を増やすこと，次世代の総会等での演者の育成等を目的としてスタートしたと記憶しております。

今回はその当初の目的を思い返してメインタイトルを，“「若手歯科医師」による！」インプラント治療の包括的マネジメント”といたしました。演者は各施設から推薦していただいた 10 名の先生方になります。内容は各演者にお任せいたしました。日常臨床で取り組んでいる内容や各施設での研修内容を含めた発表をお願いしております。内容により 3 セクションに分け，それぞれ 2 名の座長により進める形式を予定しております。各研修施設での専修医，専門医，指導医を目指している演者の先生方の臨床内容や取り組みを知ることで，参加される先生方の今後の目指すべき方向や指導方法など今後の参考になれば幸いです。また若手の先生方による発表ではありますが，臨床内容的にも大変興味深い演題ばかりであり，出席される先生方の明日からの臨床にきっと役立つ内容があると思います。

会場は人数の制限があり，事前登録を基本にしておりますが，例年当日参加も空席があれば可能となっております。できれば，多くの先生方に事前参加登録をお願いいたします。

シンポジウム参加費は無料となっております。お昼は軽食を用意しております。このようなシンポジウムの運営ができるのも，支部からの援助と展示等協賛いただいた各企業の皆さまのおかげになります。

休憩時間もしっかり確保いたしましたので，是非，企業展示ブースにも顔を出して頂きたいと思います。8 月のシンポジウムということで近年は異常気象であり，高温多湿になる事が十分予想されます。クールビズはもちろんです。ぜひ軽装（短パン，アロハシャツなど）でご参加いただき，冷房の効いた室内で一緒に勉強いたしましょう。

セッションプログラム

開 会

10:00	開会式 支部長挨拶	萩原 芳幸
	大会長挨拶	廣安 一彦

セッション 1

座長：熱田 互 / 伊藤 太一

10:10 ~ 10:30	『Extended Reality 技術を用いた ラテラルウィンドウテクニックの術前マネジメント』 春日 太一 日本歯科先端技術研究所
10:30 ~ 10:50	『FP3 補綴装置を用いた即時修復による全顎的アプローチ』 和久田 滯 東京科学大学病院 口腔インプラント科
10:50 ~ 11:10	『当科における専門医取得について』 松田 雅嗣 日本歯科大学新潟病院口腔インプラント科

11:10 ~ 11:30	休憩
---------------	----

セッション 2

座長：関根 大介 / 関 啓介

11:30 ~ 11:50	『インプラントを守る IRPD —デンチャースペースを考慮する—』 新保 秀仁 鶴見大学歯学部口腔リハビリテーション補綴学講座
11:50 ~ 12:10	『インプラントと義歯を用いた全顎補綴治療』 大塚 正喜 さいたまインプラント研究会
12:10 ~ 12:30	『インプラント治療における機械的合併症について』 小島 亮人 インプラント再建歯学研究会

12:30 ~ 14:00	昼食休憩 / 企業展示
---------------	-------------

■ 軽食をご用意しております。1階ロビーまでお集まりください。

セッションプログラム

セッション 3

座長：鈴木 恭典 / 小林 英三郎

- 14：00 ～ 14：20 『My Essentials - Regeneration and Minimally Invasive -』
宮下 達郎
日本インプラント臨床研究会
- 14：20 ～ 14：40 『6mm ショートインプラントの治療戦略
～ 適応症と長期予後を考える ～』
平野 友基
東京歯科大学口腔インプラント学講座
- 14：40 ～ 15：00 『上顎洞底挙上術で留意すべきポイントと
トラブル時のリカバリー』
小山 亮
日本大学歯学部付属歯科病院 歯科インプラント科
- 15：00 ～ 15：20 『唇顎口蓋裂患者に対するインプラント治療の展望』
福留 彩音
東京大学医学部附属病院 口腔顎顔面外科・矯正歯科

閉会

- 15：20 ～ 15：40 表彰式 / 次回大会のご案内



座長

熱田 互

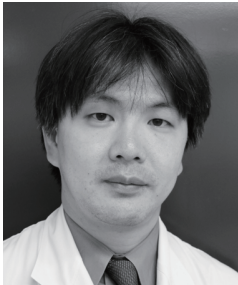
一般社団法人 日本インプラント臨床研究会

【略歴】

2000年 日本大学松戸歯学部 卒業
 2004年 日本大学大学院松戸歯学研究科 修了 博士（歯学）
 2012年 ブロッサムデンタルオフィス 開業（東京都葛飾区）

【所属及び所属学会等】

一社日本インプラント臨床研究会 認定会員，理事，副専務
 公社日本口腔インプラント学会 代議員，専門医，指導医
 関東・甲信越支部 広報委員会委員
 一社日本歯科専門医機構認定歯周病専門医，歯科保存専門医
 特非日本臨床歯周病学会 専務理事，認定医，指導医
 特非日本歯科保存学会 評議員，上級医
 ITI Study Club 千葉北 Director
 公社葛飾区歯科医師会 学術委員会委員長
 日本大学松戸歯学部同窓会東京支部連合 学術担当理事



座長

伊藤 太一

東京歯科大学千葉歯科医療センター

【略歴】

1994年 東京歯科大学卒業
 1998年 東京歯科大学大学院歯学研究科（歯周療法学専攻）修了
 1998年 東京歯科大学歯科保存学第二講座 助手
 2005年 東京歯科大学千葉病院口腔インプラント科 助教
 2008年 東京歯科大学口腔インプラント学研究室 講師
 2016年 東京歯科大学口腔インプラント学講座 准教授
 2016年 東京歯科大学千葉病院専門歯科系部長
 2020年 東京歯科大学千葉歯科医療センター 副センター長
 2024年 東京歯科大学千葉歯科医療センター 病院教授

【所属及び所属学会等】

日本口腔インプラント学会 専門医・指導医
 日本歯周病学会 専門医・指導医
 日本顎顔面インプラント学会

Extended Reality 技術を用いた ラテラルウィンドウテクニックの術前マネジメント

Preoperative Management of the Lateral Window Technique Using Extended Reality Technology



春日 太一 Taichi Kasuga
公益社団法人 日本歯科先端技術研究所

【略歴】

2016 年 日本歯科大学卒業
2021 年 日本口腔インプラント学会・日本歯科先端技術研究所入会
2026 年現在 春日歯科医院（長野県）勤務
船橋あらき歯科・矯正歯科医院（千葉県）勤務
島根大学大学院医学系研究科医科学専攻（島根県）

【所属及び所属学会等】

日本歯科先端技術研究所
日本口腔インプラント学会専修医

上顎臼歯部インプラント治療において、垂直的骨量不足を伴う症例ではサイナスフロアエレベーションが重要な選択肢となる。なかでもラテラルウィンドウテクニックは、十分な挙上量を得やすい一方、上顎洞粘膜穿孔、隔壁への対応、開窓位置の設定、骨補填材填入、インプラント埋入位置の判断など、多くの臨床的要素を総合的に管理する必要がある。今回の学術シンポジウムのテーマである「若手歯科医師による！インプラント治療の包括的マネジメント」を踏まえると、本術式の習得には単なる手技訓練に加え、診断、術式设计、チーム内共有、偶発症回避を含めた包括的な術前準備が不可欠である。

近年、Extended Reality 技術（XR 技術）は、CBCT データをもとに患者固有の解剖学的構造を三次元的に可視化し、術前シミュレーション&トレーニングを可能にする手段として注目されている。XR 技術を用いることで、上顎洞底、洞内隔壁、歯槽骨形態、インプラント埋入予定位置、ラテラルウィンドウ設計部位を立体的に確認でき、術者は骨削除範囲、粘膜挙上方向、器具の挿入角度、骨補填材填入量を術前に検討できる。また、術者と介助者が同一の三次元情報を共有することで、術中の判断のずれを減らし、手術全体の流れを標準化しやすくなる。

本発表では、サイナスフロアエレベーションにおけるラテラルウィンドウテクニックを対象に、XR 技術を用いた術前シミュレーション&トレーニングの有用性について報告する。XR 技術の活用により、術前段階で解剖学的リスクを把握し、開窓から上顎洞粘膜挙上、骨補填材填入、インプラント埋入までの手順を具体的に確認できた。これは若手歯科医師が安全性と再現性を高めながらインプラント治療を行ううえで、包括的マネジメントを支援する有効な教育手段となり得る。今後は、手術時間、偶発症発生率、術者の主観的負荷、教育効果などを客観的に評価し、XR 技術の臨床教育への応用可能性をさらに検討していく。

FP3 補綴装置を用いた即時修復による全顎的アプローチ

A Full-Arch Rehabilitation Approach Using Immediate Restoration with an FP3 Prosthesis



和久田 滢 Rei Wakuta

東京科学大学病院 口腔インプラント科

【略歴】

2020 年 東京医科歯科大学歯学部歯学科 卒業

2021 年 東京医科歯科大学病院 歯科臨床研修医 修了

東京医科歯科大学病院 口腔インプラント科 入局

2026 年 東京科学大学病院 口腔インプラント科 特任助教

【所属及び所属学会等】

日本口腔インプラント学会

日本顎顔面インプラント学会

無歯顎症例やフルアーチでの介入が必要となる症例に対し、ボーンアンカーブリッジによる機能回復は有効な治療法として広く普及している。その中でも高度な顎堤の萎縮により軟組織、硬組織の喪失が著しいケースにおいて、組織の獲得を図るために広範囲の大規模な骨増生や軟組織移植を行う場合、侵襲も大きく治療期間が長期にわたり、身体的、経済的にも患者に多大な負担がかかることとなる。そういった処置を回避して審美、構音、咬合機能を回復させるために、人工歯肉付きの上部構造（Carl E.Misch の分類における FP3）が選択されるケースは多い。

FP3 の補綴装置を用いた修復では、軟組織の形態にかかわらず理想的な歯冠形態を再現しやすく、患者の審美的な要求に対応しやすい。しかし、補綴装置と粘膜の境界がスマイルラインよりも歯冠側にきてしまうと、審美的な回復が極めて困難となる。また、不良な補綴形態や境界が口腔前庭に近くなることで清掃性が低下してしまう、術前からの口腔内環境の変化が大きく、舌や頬粘膜を噛んでしまう、舌触りが気になる、発音がしにくい、といった患者からの訴えが生じるリスクがある。

そういった事例を回避するためには、術前から補綴設計の診断や治療方針の立案が極めて重要となる。

今回の講演では、当科において日常的に行っている初診から手術、即時修復にいたるまでのアプローチについて、実際の症例を交えながら紹介させていただく。臨床上意識している項目や課題について共有しながら、今後の臨床に活かせるような議論ができれば幸いである。

当科における専門医取得について

Achieving Specialist Certification in Our Department



松田 雅嗣 Masashi Matsuda

日本歯科大学新潟病院口腔インプラント科

【略歴】

2019年3月 日本歯科大学新潟生命歯学部 卒業

2020年3月 日本歯科大学新潟病院臨床研修歯科医師 修了

2020年4月 日本歯科大学新潟病院口腔インプラント科 入局

2026年2月 日本口腔インプラント学会専門医 取得

【所属及び所属学会等】

日本口腔インプラント学会

顎顔面口腔インプラント学会

【緒言】

私は2020年に日本歯科大学新潟病院口腔インプラント科に入局し現在に至るまで日々インプラント治療に従事している。今回はこれまでの6年間を振り返り、インプラント治療の包括的アプローチと、大学系研修施設である当科の取り組みを考察も交えて報告する。

【概要】

2020年4月に日本歯科大学新潟病院口腔インプラント科入局した。当初はメンテナンスや上級医のアシスタントを行いながらインプラント治療の基礎について学んだ。また、総合診療科において歯周治療や保存治療も行い、一口腔単位でのアプローチを重視している。4か月間の口腔外科研修では、外科的基本手技、抜歯、偶発症への対応等について教育を受けることができた。

2年目以降は診査診断から埋入手術、補綴処置、メンテナンスまでの一連の処置を自らで行っている。治療計画については当科医局員以外も参加する検討会が隔週で行われており、包括的なアプローチが可能になっている。

2024年度に本学会専修医を取得し、2025年度に専門医を取得、現在はサイナスリフトをはじめとする骨造成、結合組織移植術や遊離歯肉移植術などのティッシュマネジメントなど、機能的、審美的により高度な次元での治療を目指している。

また、大学系臨床施設として十分に機能するよう他科・専門職種との連携を密にチーム医療を行っている。

【結語】

大学系臨床施設として、一口腔単位での対応はもちろんのこと、外科的基本手技や軟組織へのアプローチ等で専門的な知見を学ぶ環境が整っていると考える。また、今後の専門医制度においては、大学系臨床施設の重要性はさらに高まると思われる。今後もさらに他科・多職種との連携と情報共有を進めていく予定である。



座長

関根 大介

NPO 法人埼玉インプラント研究会

【略歴】

2007 年 3 月 日本歯科大学生命歯学部卒業
2007 年 4 月 鶴見大学歯学部附属病院臨床研修医
2008 年 4 月 日本歯科大学附属病院口腔外科
2010 年 4 月 横浜南共済病院歯科口腔外科
2012 年 4 月 日本歯科大学附属病院口腔外科
2014 年 4 月 医療法人関根歯科医院

【所属及び所属学会等】

NPO 法人埼玉インプラント研究会 理事
日本口腔インプラント学会 専門医
日本口腔外科学会 認定医
日本歯周病学会



座長

関 啓介

日本大学歯学部附属歯科病院 歯科インプラント科

【略歴】

1997 年 日本大学歯学部 卒業
2006 年 同大学歯学部 助手
2016 年 同大学歯学部 専任講師（総合歯科学分野）
2018 年 日本大学歯学部三島歯科医療センター 主任
2025 年 同大学歯学部 准教授（総合歯科学分野）
2026 年 日本大学歯学部 診療教授

【所属及び所属学会等】

日本口腔インプラント学会専門医・指導医 代議員
日本歯周病学会専門医・指導医
日本総合歯科学会認定医・指導医

インプラントを守る IRPD ―デンチャースペースを考慮する―

Implant-protective IRPDs -Prosthetic design approach incorporating the denture space concept-



新保 秀仁 Hidemasa Shimpo

鶴見大学歯学部口腔リハビリテーション補綴学講座

【略歴】

2003 年 鶴見大学歯学部歯学科 卒業

2003 年 鶴見大学大学院歯学研究科 入学

2004 年 Faculty of Uruguay, Uruguay University (Visiting Scientist)

2016 年 USC, Herman Ostrow School of Dentistry (Visiting Scholar)

2025 年 鶴見大学歯学部口腔リハビリテーション補綴学講座 講師

【所属及び所属学会等】

(公社) 日本補綴歯科学会 専門医・指導医 (機構認定専門医)

(一社) 日本デジタル歯科学会 専門医

(公財) 日本スポーツ協会 公認スポーツデンティスト

インプラントオーバーデンチャー (IOD) やインプラント支持可撤性部分床義歯 (IRPD) におけるインプラントの埋入位置は、一般に歯槽骨の形態学的条件と、義歯機能時に生じる力学的負荷の観点から決定される。一方、上部構造としての義歯形態は顎堤形状や残存歯の状態に大きく依存する。可撤性補綴装置では患者固有の可動組織が存在し、義歯の安定性に影響を及ぼすだけでなく、支持様式、支台歯や顎堤の状態、対咬関係により負荷分布が大きく異なる。特に歯根膜・粘膜支持義歯では、支台歯と顎堤の双方に支持を求めるため、局所的な過大負担を回避しつつ動揺を最小限に抑える設計が求められる。

IRPD は従来の可撤性義歯にインプラントを介在させることで顎骨支持を付与した補綴装置であり、インプラントへの過度な負担を避けるためには、義歯の設計や形態がきわめて重要となる。義歯形態や人工歯排列によって可撤性補綴装置を安定させる方法の一つに、口腔周囲筋の圧が中立となる補綴学的空間であるニュートラルゾーンの活用がある。義歯の研磨面形態や人工歯排列をこの領域に調和させることで、筋活動を阻害しない機能的で安定した義歯形態を得ることができる。

本発表では、デンチャースペースの記録法であるピエゾグラフィを応用し、義歯形態からインプラント埋入位置を決定するトップダウントリートメントの概念を、IRPD に適用する意義について検討する。従来の「骨条件から位置を決める」アプローチに対し、補綴装置としての最終形態を先に規定することで、機能時の力学的安定性を考慮したインプラント配置が可能となる。さらに、IRPD におけるアタッチメント選択についても、清掃性、維持力、力の伝達様式、メンテナンス性の観点から比較し、インプラント保護の観点で推奨される設計指針について議論する。

インプラントと義歯を用いた全顎補綴治療

Full-mouth reconstruction using implants and dentures



大塚 正喜 Masaki Otsuka

さいたまインプラント研究会

【略歴】

2011年明海大学 歯学部卒業

2020年トンボ歯科クリニック北浦和 開設

【所属及び所属学会等】

日本口腔インプラント学会 会員

NPO 法人 埼玉インプラント研究会 所属

【目的】

上下顎無歯顎症例における咬合の再構築は、義歯の支持・維持・安定や患者の満足度を考慮した慎重な診断が必要となる。今回、総義歯の不適合と咀嚼困難を訴える患者に対し、上顎に全部床義歯、下顎にインプラント支持型固定性補綴（ボーンアンカードブリッジ）を適用し、デジタル技術を活用して良好な治療結果を得た症例について報告する。

【症例の概要】

患者は62歳女性。主訴は「入れ歯で食事がし辛い」。10年以上、上下総義歯を使用していたが、特に下顎総義歯の安定が悪く咬合が不安定であった。パノラマエックス線およびCT所見より、下顎歯槽骨の高度な吸収と、上顎臼歯部における著しい骨吸収が認められた。

【治療計画および経過】

上顎は外科的侵襲や解剖学的制約を考慮し、通常の一部床義歯（FD）による機能回復を行う方針とした。下顎にはSIMPLANTによるガイドドサージェリーを用いてインプラントを埋入し、暫間補綴物（TEK）にて咬合高径および顎位の安定を図った。TEKの調整過程で生じた咬合平面の偏位に対しては、最終補綴のステップで補正を行った。

下顎の最終上部構造には、ISUS（チタンハイブリッドストラクチャー）を用いた固定性ブリッジ（両側第1小臼歯形態までの遠心延長）を選択。上顎FDの人工歯排列および下顎ボーンアンカードブリッジの咬合平面を適切に調和させ、最終補綴物を装着した。

【考察・結語】

本症例のように、上顎が粘膜支持（FD）、下顎が強固なインプラント支持（固定性ブリッジ）という上下顎で支持組織が大きく異なる場合、下顎からの強い咬合圧による上顎粘膜への負担や、将来的な骨吸収のリスクを考慮した咬合設計が極めて重要となる。本症例ではデジタルワークフローを活用することで、正確なインプラント埋入と補綴主導の咬合構成が可能となり、咀嚼機能および審美性の著しい改善と、長期的な維持安定を示唆する良好な結果を得られた。

インプラント治療における機械的合併症について

Mechanical Complications in Dental Implant Treatment



小島 亮人 Akihito Kojima
インプラント再建歯学研究会

【略歴】

2013年 日本大学松戸歯学部 卒業

2014年 医療法人フロンティア 山脇歯科医院、新宿フロントタワー歯科 勤務

2018年 医療法人フロンティア 山脇歯科医院 院長

【所属及び所属学会等】

日本口腔インプラント学会 専門医

日本歯周病学会 認定医

インプラント再建歯学研究会

歯科インプラント治療は、補綴治療の一選択肢として高い成功率と長期的な予後が確認されており、現在では標準的な治療として広く普及している。

しかしながら、インプラント体の骨結合が良好に得られた後も、インプラント上部構造やアバットメントにおける機械的合併症は臨床上的重要な問題として認識されている。

機械的合併症には、アバットメントスクリューの緩みおよび破折、インプラント体自体の破折、上部構造（クラウン・ブリッジ）の破損やチッピング、セメントの脱離などが含まれる。なかでもスクリューの緩みは最も頻度の高い合併症であり、咬合力の集中や連結部の適合不良、トルク管理の不徹底が主たる原因として挙げられる。

これらの合併症の発生には、補綴設計・咬合様式・パラファンクション（ブラキシズムなど）・インプラント径や長さの選択・テーパー接続の種類など、多因子が複雑に関与している。特にカンチレバー設計や過大な補綴スパンは応力集中を招きやすく、長期的なリスク因子となる。

本発表では、臨床研究における機械的合併症の発生状況を後ろ向きに検討し、リスク因子の分析と臨床的対応策について報告する。



座長

鈴木 恭典

鶴見大学歯学部附属病院インプラント科

【略歴】

1988年 鶴見大学歯学部卒業
 1993年 同大学大学院修了
 1993年 同大学歯学部歯科補綴学第一講座 助手
 2010年 同大学歯学部附属病院口腔顎顔面インプラント科 助教
 2013年 同大学歯学部附属病院口腔顎顔面インプラント科 講師
 2019年 同大学歯学部口腔リハビリテーション補綴学講座 准教授
 (2023年講座名変更)
 2026年 鶴見大学歯学部附属病院インプラント科 科長

【所属及び所属学会等】

公益社団法人日本補綴歯科学会指導医
 公益社団法人日本口腔インプラント学会指導医
 日本デジタル歯科学会
 日本磁気歯科学会



座長

小林 英三郎

日本歯科大学新潟病院口腔外科

【略歴】

1995年3月 日本歯科大学新潟歯学部卒業
 1999年3月 博士(歯学)取得
 2000年8月～2002年7月 京都大学再生医科学研究所臓器再建応用分野 研修員
 2000年8月 日本歯科大学新潟歯学部口腔外科学第2講座助手
 2005年4月 日本歯科大学新潟歯学部口腔外科学第2講座講師
 2015年4月～2017年3月 スイス・ベルン大学顎顔面外科学講座 留学
 2017年7月 日本歯科大学新潟病院 MRONJ 外来開設(医長)
 2022年1月 日本歯科大学新潟病院 歯の細胞バンク外来医長
 2022年4月 日本歯科大学新潟病院口腔外科 准教授

【所属及び所属学会等】

日本口腔外科学会 代議員	日本口腔外科学会
日本外傷歯学会東日本地方会 代議員	日本口腔科学会
日本口腔外科学会 専門医	日本口腔腫瘍学会
日本口腔インプラント学会 専門医	日本有病者歯科医療学会
がん治療認定医(歯科口腔外科)	日本老年歯科医学会
ICD 認定医	日本顎変形症学会
	日本歯科薬物療法学会
	日本顎顔面インプラント学会
	日本口腔ケア学会
	日本小児口腔外科学会

My Essentials - Regeneration and Minimally Invasive -



宮下 達郎 Tatsuro Miyashita
一般社団法人日本インプラント臨床研究会

【略歴】

2013 年 明海大学歯学部歯学科 卒業
同年 慶應義塾大学医学部歯科口腔外科 入局
2015 年 慶應義塾大学医学部歯科口腔外科 助教
2024 年 医療法人社団パーフェクトスマイル 理事長

【所属及び所属学会等】

日本口腔インプラント学会 専門医
日本歯周病学会 専門医
日本歯科専門医機構 認定歯周病専門医
一般社団法人日本インプラント臨床研究会 総務委員長
慶應義塾大学歯周病研修会

フェノタイプが薄い傾向にある患者への治療は硬・軟組織の様々な要件を考慮しなければならない。歯周治療、インプラント治療においては生体を完全に模倣することはできないため、生体が許容できる再建手段、材料が重要と考えている。

Connective Tissue Graft (CTG)、サイナスフロアエレベーションといった再生治療は軟組織形成、骨造成におけるアドバンステクニックであるが、インプラント治療適応部位の審美的、解剖学的要件から術式選択する場面が多い。難易度も増すが、患者満足度を高めるためには、いかにシンプルで侵襲度を低い計画を立てるかが重要である。また、近年軟組織代替材料として ADM (Acellular Dermal Ma-trix), XCM (Xenogeneic Colla-gen Matrix), VCMX (cross-linked Volume-stable Collagen Ma-trix) といった様々なものが開発・使用されている。しかしそういった代替材料と比較すると CTG は非常にコストパフォーマンスに優れた生体材料、術式であり、コンプリケーションに関して注意すれば非常に安全かつ有用であると考えられる。本発表では実際の症例から術式の選択、インプラント・天然歯におけるに再生治療を供覧したい。審美的要件をクリアするためには拡大視野での精緻な操作とマイクロサージェリーに特化したインスツルメントの使用が鍵となる。

6mm ショートインプラントの治療戦略 ～ 適応症と長期予後を考える ～

Treatment strategies for 6-mm short implants: considering indications and long-term prognosis



平野 友基 Tomoki Hirano

東京歯科大学口腔インプラント学講座

【略歴】

2010 年 東京歯科大学歯学部 卒業

2015 年 東京歯科大学大学院歯学研究科（口腔インプラント学専攻）修了

2021 年 埼玉県立大学 非常勤講師

2022 年 東京歯科大学口腔インプラント学講座 講師

2022 年 東京歯科大学水道橋病院口腔インプラント科 医局長

【所属及び所属学会等】

東京歯科大学口腔インプラント学講座

日本口腔インプラント学会

日本顎顔面インプラント学会

日本歯科審美学会

Asian Association of Oral and Maxillofacial Surgeons

インプラント治療の垂直的骨量不足症例においては、骨造成術や上顎洞底挙上術が重要な治療選択肢となる。しかしながら、これらの術式は患者の身体的負担や治療期間の延長、術後合併症のリスクを伴う。一方、世界的に高齢化が進行しており、より安全で低侵襲な歯科治療へのニーズが高まっている。とりわけ日本は世界有数の超高齢社会であり、インプラント治療においても低侵襲かつ予知性の高い治療戦略が求められている。このような背景のもと、6 mm ショートインプラントは骨造成術や上顎洞底挙上術を回避しながら機能回復を図ることが可能であり、身体的負担の軽減に加え、治療期間や来院回数の短縮、医療費負担の軽減にも寄与し得ることからその臨床応用は拡大している。

これまでの6 mm ショートインプラントに関する報告では、標準長径インプラント（8mm,10mm）と同等の良好な臨床成績を示すとの報告がある一方で、長期的には生存率の低下を指摘する報告もみられ、その評価は必ずしも一致していない。また、骨量や骨質、咬合条件、欠損形態、喫煙や全身疾患などの患者因子が予後に影響を及ぼす可能性も示唆されており、適応症の選択が重要な課題となっている。

本講演では、6 mm ショートインプラントの生物学的・力学的特徴を整理し、適応症およびリスク因子について概説する。また、上顎洞底挙上術や垂直的骨造成術との比較を通じて、低侵襲治療としての位置付けと治療選択の考え方について考察する。さらに、当施設における日本人患者を対象とした6 mm ショートインプラントの長期追跡データをもとに、累積生存率および予後関連因子を検討するとともにインプラントロスト症例の特徴について考察する。また、既報との比較を通じて、6 mm ショートインプラントの有効性と限界について検討する。

本シンポジウムを通じて、6 mm ショートインプラントの長期予後に関するエビデンスを整理するとともに、どのような症例に適応すべきか、またどのような症例で慎重な対応が求められるのかについて考察し、エビデンスと臨床経験の双方に基づいた治療戦略について議論したい。

上顎洞底挙上術で留意すべきポイントとトラブル時のリカバリー

Complications of sinus floor elevation procedure and management strategies



小山 亮 Ryo Koyama

日本大学歯学部附属歯科病院 歯科インプラント科

【略歴】

2016年 日本大学歯学部卒業
2018年 日本大学歯学部歯学研究科入学
口腔外科学第Ⅱ講座入局
2022年 日本大学歯学部歯学研究科卒業
2023年 口腔外科学第Ⅱ講座 助教

【所属及び所属学会等】

日本口腔外科学会
日本口腔インプラント学会
日本顎顔面インプラント学会
日本顎顔面補綴学会
日本再生医療学会

上顎洞底挙上術（sinus floor elevation）は、上顎臼歯部の垂直的骨量が不足した症例に対するインプラント治療において広く用いられている術式であり、埋入窩から上顎洞粘膜を挙上するクレスタルアプローチと、上顎洞側壁に骨窓を形成して上顎洞粘膜の挙上を行うラテラルアプローチがある。残存歯槽骨の骨吸収が著しい症例に対してはラテラルアプローチが用いられるが、本術式は上顎洞という解剖学的に複雑な領域を対象とするため、術中偶発症に対する十分な理解と対応が求められる。

ラテラルアプローチにおいて最も頻度の高い術中偶発症は上顎洞粘膜の穿孔であり、文献により報告には差はあるものの、最新のシステマティックレビューでは 19.2% に発生すると報告されている。上顎洞粘膜穿孔の原因には回転切削器具や剥離子など術中に用いる器具の操作に起因するもの、隔壁などの上顎洞の解剖学的形態に起因するもの、また、喫煙歴や慢性副鼻腔炎の有無などがあげられる。そのため、術前に全身状態を把握した上で、歯科用 CT を用いて上顎洞の解剖学的形態や上顎洞粘膜の厚さなどを評価し手術計画を立案することが重要である。

上顎洞粘膜に穿孔や裂開が生じると填入した人工骨や自家骨が上顎洞内へ流出する原因となるほか、術後感染リスクを増加させるなど、さまざまな問題が生じる。穿孔が生じた場合には、その大きさに応じた対応が必要である。10mm 未満の小さい穿孔であればコラーゲン膜、多血小板血漿（PRP：platelet rich plasma）、多血小板フィブリン（PRF：platelet rich fibrin）などによる被覆のみで対応できる場合も多い。一方、大きな穿孔や裂開が生じた場合には、上顎洞粘膜の縫合や、場合によっては手術を中止し、上顎洞粘膜が回復後に再手術をすることが推奨される。

本演題では、ラテラルアプローチにおいて特に臨床上遭遇しやすい偶発症である上顎洞粘膜の穿孔・裂開に焦点を当て、術中に注意すべきポイントとリカバリー方法について考察する。

唇顎口蓋裂患者に対するインプラント治療の展望

Current Status and Future Perspectives of Implant Therapy for Patients with Cleft Lip and Palate



福留 彩音 Ayane Fukutome

東京大学医学部附属病院 口腔顎顔面外科・矯正歯科

【略歴】

2019 年 日本大学 歯学部 卒業

2025 年 東京大学大学院医学系研究科外科学専攻 博士課程修了（医学博士）

2025 年 東京大学医学部附属病院 顎顔面外科・矯正歯科 特任臨床医

【所属及び所属学会等】

日本口腔インプラント学会

日本口腔外科学会

日本口蓋裂学会

日本再生医療学会

日本骨形態計測学会

東京大学医学部附属病院顎顔面外科・矯正歯科では、日本口腔インプラント学会研修施設として、多様な顎骨欠損症例に対するインプラント治療を行っている。その中でも唇顎口蓋裂患者は、先天欠如歯、顎裂部骨欠損、瘢痕組織の存在、顎顔面形態の変化など複数の問題を抱えており、一般的な部分欠損症例と比較して、より高度な検査・診察および包括的な治療計画の立案が求められる。さらに、成長発育や矯正歯科治療、顎裂部骨移植との連携を考慮した長期的視点での治療介入が必要であり、インプラント治療は機能回復のみならず審美性の改善や患者の QOL 向上において重要な役割を担っている。

当院口唇口蓋裂センターでは、口腔外科、矯正歯科、耳鼻咽喉科、言語聴覚士など多職種が連携し、出生前診断から成人期まで継続した診療を行っている。本発表では、当科における唇顎口蓋裂患者へのインプラント治療の実際を紹介するとともに、その適応、治療計画立案、外科処置、補綴処置および術後メンテナンスについて概説する。また、顎裂部へのインプラント治療において留意すべき解剖学的特徴や骨移植との関係、長期予後を見据えた包括的マネジメントについて考察する。

さらに、若手歯科医師として専門医取得を目指す過程において、三次元画像解析を用いた検査、デジタルプランニング、骨造成を含む外科手技、補綴設計、周術期管理および長期メンテナンスに関する知識・技術の習得に日々取り組んでいる。唇顎口蓋裂患者のような複雑な顎顔面欠損症例への対応を通じて、インプラント治療における包括的マネジメントの重要性を再認識している。

加えて、将来的な治療発展の可能性として再生医療研究について紹介する。演者はこれまで、口唇裂に対する再生医療の基盤構築を目的としてマウス口唇裂器官培養モデルを確立し、脂肪由来幹細胞シートによる組織修復効果を検証してきた。今後は口蓋裂および顎裂部における骨・軟組織再生技術の開発を通じて、インプラント治療の適応拡大と予知性向上を目指している。臨床と研究の両面から、唇顎口蓋裂患者に対するインプラント治療の現状と将来展望について報告する。

MEMO

本シンポジウムの開催にあたり、多くの企業様からのご協力をいただきました。
深く感謝申し上げます。

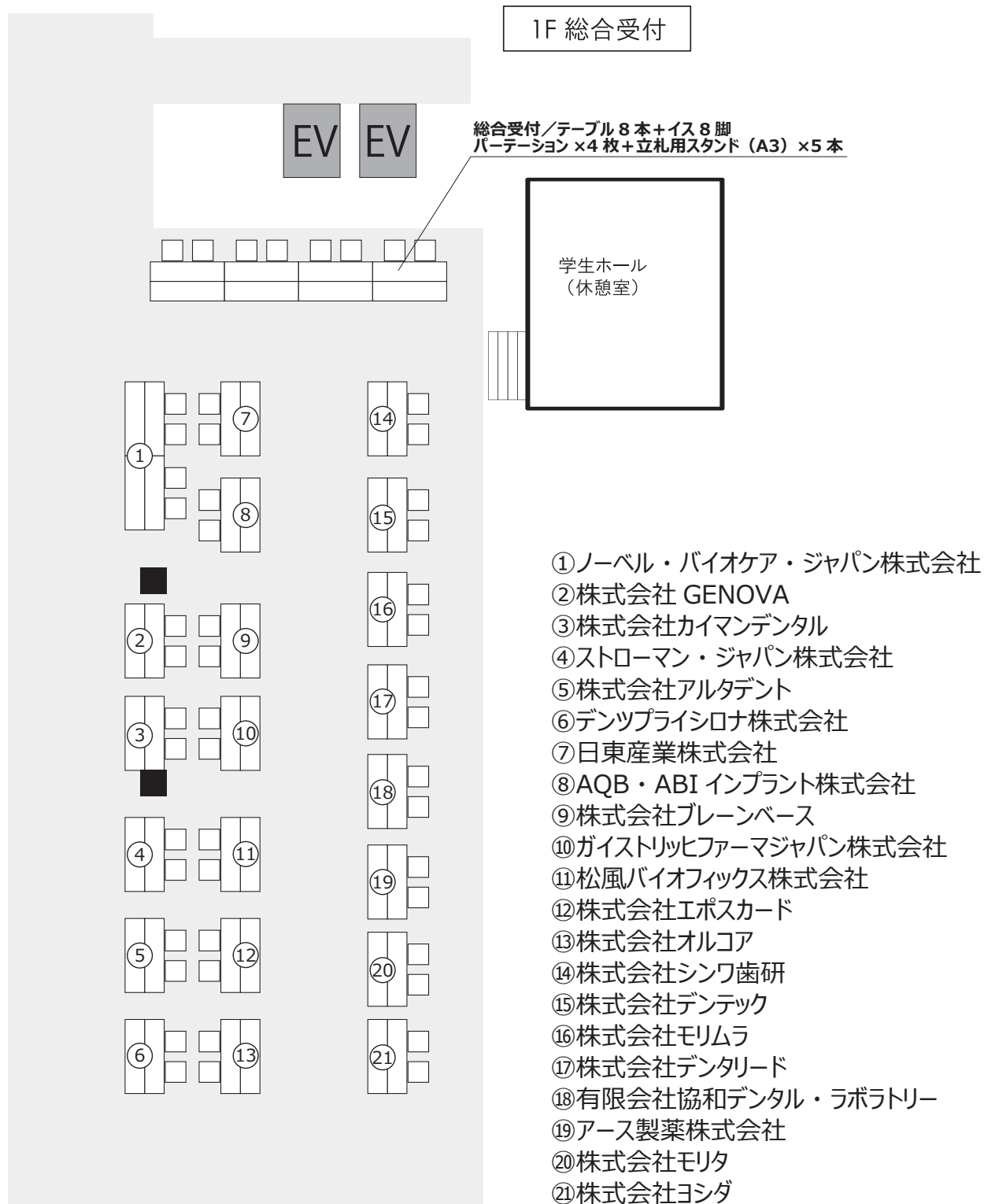
(50音順、2026年7月13日現在)

企業展示 (21 社)

アース製薬株式会社
株式会社アルタデント
株式会社エポスカード
AQB・ABI インプラント株式会社
株式会社オルコア
株式会社カイマンデンタル
ガイストリッヒファーマージャパン株式会社
松風バイオフィックス株式会社
株式会社シンワ歯研
株式会社 GENOVA
ストローマン・ジャパン株式会社
日東産業株式会社
ノーベル・バイオケア・ジャパン株式会社
株式会社デンタリード
有限会社協和デンタル・ラボラトリー
デンツプライシロナ株式会社
株式会社デンテック
株式会社ブレーンベース
株式会社モリタ
株式会社モリムラ
株式会社ヨシダ

プログラム・抄録集広告掲載 (1 社)

株式会社デンタリード



公益社団法人日本口腔インプラント学会 関東・甲信越支部 第16回学術シンポジウム プログラム・抄録集

2026年7月15日 印刷

2026年7月20日 発行

発行所 公益社団法人日本口腔インプラント学会
〒108-0014 東京都港区芝 4-3-5 ファースト岡田ビル 8F
E-mail : jsoi@peace.ocn.ne.jp

制 作 株式会社インターベント
〒103-0005 東京都中央区日本橋久松町 11-8 REGRARD NINGYOCHO 5F
TEL : 03-3527-3893 FAX : 03-3527-3889 E-mail : jsoi-jimudaiko@intervent.co.jp



Japanese Society
of Oral Implantology